

あ な た と 市 政 を む す ぶ



広報
No.212

かんおんじ

2023 / 令和 5 年

6

June

特集

島 比呂志

没後20年



特集 没後20年 島比呂志

観音寺市出身の作家で、ハンセン病回復者である島比呂志さんが亡くなってから20年になります。50年以上療養所で隔離生活を送り、社会復帰を果たしましたが、故郷に帰ることはありませんでした。島さんの歩んだ人生を振り返ります。

獣医学の研究者として

島比呂志さんは1918年、観音寺市柞田町に生まれました。本名は岸上薫。旧制三豊中学校（現在の観音寺第一高等学校）卒業後、東京高等農林学校（現在の東京農工大学）獣医学科に入学しました。卒業後は大陸科学院獣疫研究所に就職し、満州へ渡ります。その後、母校の東京高等農林学校の助教授となり、27歳のときに先輩や教え子らと動物のワクチンなどを製造する研究所を設立しました。しかし、ハンセン病の兆候が顕著になり始め、突如帰郷します。自宅にこもり童話を執筆してい

ましたが、1947年、29歳のときに木田郡庵治村（現在高松市）のハンセン病療養所・大島青松園へ再入所。翌年、鹿児島県鹿屋市の星塚敬愛園に転園しました。

作家・島比呂志として

各地の療養所では、患者たちによる短歌や俳句、詩、小説などの文芸活動が盛んで、星塚敬愛園も活動が活発でした。園内誌『始良野』（入所者自治会機関誌）がありましたが、島さんは1958年に星塚敬愛園内で文芸同人誌『火山地帯』を創刊します。患者や療養所の職員に限らず、

全国各地からさまざまな職業の人が参加し、文学集団が形成されました。

島さんは、「文章だけが療養所の垣根を越える唯一の、手段であった。書くことが苦手などとは言っておられなかった。わたしは無我夢中で書いた」「書くという行為の中にしか、不条理を打破して人間回復をはかる術はないと考えていたし、それが絶望的環境の中で生きる唯一の生き甲斐であった」と著書に記しています。

島さんと同人の作品は文芸誌に取り上げられ、芥川賞候補を生むなど、『火山地帯』から多くの作家が育ちました。

国家賠償請求訴訟 原告団名誉団長として活動

1998年7月、星塚敬愛園と菊池恵楓園の入所者13人が熊本地方裁判所に国家賠償請求訴訟を起こしました。島さんは80歳で原告団の名誉団長となります。

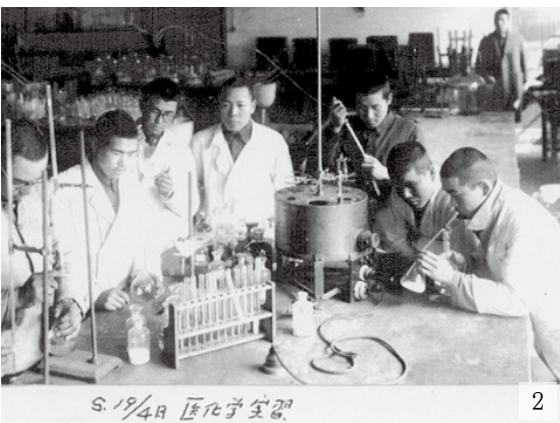
ハンセン病患者の強制隔離を定めた「らい予防法」は1996年4月に廃止されたものの、被害者への謝罪や補償はなく、国民健康保険への加入も認められないことに対す

る島さんの怒りがありました。90年に及ぶ強制隔離政策でなされた人権侵害への国の謝罪と賠償を求めた原告団に対し、2001年5月に熊本地裁は、「人として当然に持っているはずの人生のありとあらゆる発展可能性が大きく損なわれ」た人格そのものに対する被害であるとし、ほぼ全面的に原告側の主張を認めました。国は控訴を断念。この訴訟を契機に、ハンセン病回復者や家族による全国一斉大量提訴へとつながっていきます。

社会復帰し、北九州市へ

島さんが51年暮らした星塚敬愛園を出て、妻・喜代子さんと福岡県北九州市に引越したのは81歳のときでした。社会復帰後、そば屋を訪れた島さんは「約60年ものあいだ、天ぷらそばの味を忘れていた」と記しています。

喜代子さんは2001年11月に永眠、島さんは、観音寺市への帰郷を願いながら、2003年3月22日に84歳で亡くなりました。



島比呂志さん略年譜

- 1918年（大正7）7月23日に観音寺市柞田町に生まれる
- 1936年（昭和11）旧制三豊中学校（現在の観音寺第一高等学校）卒業
- 1940年（昭和15）東京高等農林学校（現在の東京農工大学）卒業
- 1942年（昭和17）国立療養所大島青松園入所。翌年、軽快退所

- 1943年（昭和18）東京高等農林学校の助教授となる
- 1946年（昭和21）ハンセン病の症状が顕著になり、帰郷し童話を書き始める（昭和23年に童話集『銀の鈴』として出版）
- 1947年（昭和22）大島青松園へ再入所
- 1948年（昭和23）鹿児島県鹿屋市の国立療養所星塚敬愛園に転園
- 1958年（昭和33）同人誌『火山地帯』創刊
- 1986年（昭和61）『海の沙』で第14回南日本文学賞受賞
- 1998年（平成10）熊本地裁に国家賠償請求訴訟法に基づく訴状を提出。原告団13人の名誉団長となる
- 1999年（平成11）星塚敬愛園を出て社会復帰
- 2001年（平成13）熊本地裁「『らい予防法』違憲国家賠償請求訴訟」勝訴判決
- 2003年（平成15）3月22日永眠

表紙・2ページ写真/芥川 仁撮影

3ページ写真/

1_旧制三豊中学校時代。後列左端が島さん 2_東京高等農林学校獣医学科助教授時代。中央の白衣姿が島さん 3_北九州市での社会復帰後、町内会の皆さんと。敬老会の行事では本名の「岸上さん」と呼ばれ、輪投げやダーツなどの競技を一緒に楽しみ、「幼年時代に返ったような心のときめきを感じた」という

ふるさとと家族を思う

詩「ふるさとの家を思う」には、島さんと家族の苦悩が映し出されています。故郷に帰れない島さんを迎え入れたのは、北九州市小倉の「血より濃い水の家族」でした。

ふるさとの家を思う

島 比呂志

ふるさとの家を思う日
わたしの心は暗い
わたしが癪^{ちがひ}になった日から
ふるさとの家は灯が消えた
暗い空洞のような家の中で
父は
いつまでも顔をあげず
母は
愚痴にあげくれ
妹は
嫁にゆけぬ青春をのろい
弟は
みんなの不安にうちしおれ
ふるさとの家は
笑いを忘れてしまった

死のような十年が過ぎ
わたしは新薬プロミンのことを知らせた

ふるさとの家は
十年ぶりに灯がついたようだ
父より便りが来た

しかし その後一年
曲った指が伸びたか
脱落した眉毛が生えたか
わたしは なんと便りを書くのか
いま やっと明るんだ
ふるさとの家の灯が
また 不安におののくのを感じる
うそを書くのか
真実を書くのか

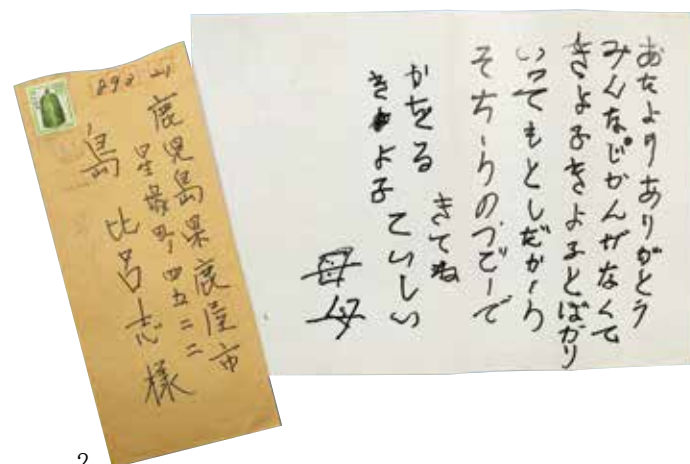
ふるさとの家を思う日
わたしの心は暗い

(1950年7月27日)

(注) かつてハンセン病は「癪^{ちがひ}病」と呼ばれていた



1



2

1_島さんと妻・喜代子さん。喜代子さんは島さんがハンセン病と知りながら結婚し、生涯と共に過ごした。患者ではない喜代子さんは療養所から出ることができ、島さんの高齢の両親を看病するため観音寺市によく帰省していた 2_帰省後に療養所に戻った喜代子さんに宛て、島さんの母が書いた手紙。明治生まれの母は文字が書けず、晩年は熱心に文字を書く練習をしていたという。両親ともに島さんに会うことなく亡くなった

水の家族と過ごした晩年

作家として名を残し、国家賠償請求訴訟名誉団長まで務めた島さんですが、故郷の観音寺市に帰ることはできませんでした。このことから、ハンセン病に対する世間の偏見や差別がどれほど深いものであるかが分かります。

島さんの家族となったのは福岡県北九州市に住む中谷昭子^{なかつたにあき}さん（現姓・岸上）でした。昭子さんは、島さんの著書『片居からの解放』を読み、

鹿児島の療養所に住む島さんに手紙を送りました。「やり取りするうちに手紙が赤ペンで添削されて返ってきました。あなたは誤字脱字が多いです、って」。ハガキ1枚でも最低10回は読み返すという島さんらしいエピソードです。昭子さんは子どもや孫を連れて島さんを訪ねるようになり、交流が始まります。「島さんが声を上げないと」と国賠訴訟への決断を後押しし、社会復帰後の住居を用意して、養子となり、支え続けました。「人権を無視され亡くなった多くの人と家族のため、そして、私がつらい時に支えてく

れた島さん夫妻を実の親のように思っていたから」と昭子さんは語ります。島さんは血のつながりはなくとも、「血より濃い水の家族」だと表現しました。島さんは昭子さんに故郷のことを繰り返し話していたそうです。「『観音寺に帰りたい』と毎日のように言っていました。ちようさ祭りのかけ声を口ずさみ、子どものころ井戸に落ちた話や学生時代に銭形の砂さらえが苦手だった話、野球部だった話も聞きました。今回の特集で島さんはやっとふるさとに帰ることができます」。



3



4



5



6

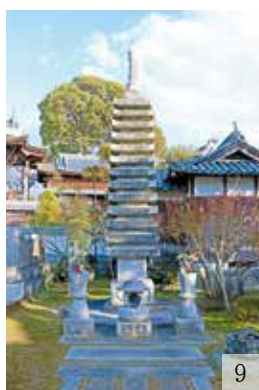
3_昭子さんの大家族に囲まれて 4_岸上昭子さん（81歳）。島さんが晩年暮らした団地に今も暮らす 5~6_昭子さんは島さん夫妻に最後まで寄り添った 7~9_夫妻の遺骨は清浄寺(北九州市)、日本文芸家協会の墓碑が並び富士霊園「文学者の墓」(静岡県小山町・写真7)、故郷の延命寺(杵田町・写真8、9)の3カ所に分骨された 10_島さんの終のすみかの北九州市小倉の市営団地前には「島桜」と名付けられた桜の木が残る



7



8



9



10

島さんをたずねて



島さんの著書の研究を行った観音寺第一高校3年生の皆さん。(前列左から) 小糸詩杏さん、石田華嬉さん、蒲生健介さん、今城美香さん、本研究担当の床田太郎教諭 ※学年は令和5年度現在



3月26日に中央図書館で開催された「島比呂志 没後20年ふさとシンポジウム」では観一高の生徒が研究発表、藤田さんが講演を行った。岸上昭子さんも孫の麻子さんと訪れ、「今回の研究が生徒たちの今後の人生に生きていけばうれしい」

旧制三豊中学校（現在の香川県立観音寺第一高等学校）を卒業した島さん。後輩たちが、島さんの足跡をたどり、島さんのことを伝える活動をしています。

会えなかった島さんの足跡をたずねて

島比呂志の研究を約20年にわたり続けてきた藤田彰一さん。自身も観音寺第一高校の卒業生であり、日本史の教師として、同校で長年教壇に立ってきました。藤田さんが島さんのことを知ったのは島さんが亡くなった2年後の2005年、7年ぶりに母校に戻ってきたからです。

「同僚の先生の紹介で、島さんのドキュメンタリー番組を見て涙が止まりませんでした。いかに自分が無知、無関心であっ



香川県立香川西部支援学校 藤田 彰一教諭（観音寺町）

たかに気付きました」。

藤田さんは島さんと会えない代わりに、遺族の岸上昭子さんをはじめ、島さんと深く関わった人々を訪ね、手紙などの貴重な資料を保管、研究するようになります。同時に、人権研修や講演、生徒を連れて大島青松園を訪問するなどの活動が続けられました。

「最初は差別を恐れたが克服し、誤りを正してほしいと闘っていく。島比呂志という人間の生き様に共感します。亡くなった人は忘れられていきますが、島さんを語り継いでいくことが私の使命であると思います。ハンセン病への差別がなくなっても、また別の病気に対して差別が起きるかもしれない。誤った選択をしないよう、自分ごととして捉えることが大切です」。

後輩たちが作品を研究・分析

観一高では人権・同和教育でハンセン病や島さんについての学習を深めてきました。令和4年度は生徒4人が島さんの作品『菜種梅雨』を分析し、内面を探究を行いました。作品は、島さんの故郷への思いが色濃く反映された自伝的小説で、同人誌『火山地帯』第41号に収められています。難解な言葉や旧字体が使われた作品を文字に起こし、分析結果をまとめるの

に苦労したそうです。島さんゆかりの地を巡ったり、当時の時代背景を探ったりと、時間をかけて研究しました。作品は、ハンセン病を患い、志半ばで隠遁生活を行うことになった島さんの葛藤や悲しみ、一貫して怒りの感情が途切れないと分析。石田華嬉さんは、「作品を通して私たちの先輩である島さんの人生に触れ、ハンセン病への理解が深まりました。自分の身近な問題だと感じることができれば、理解は進んでいくと思います」。



元・観音寺市同和対策課長 石川 和明さん（坂本町）

「体調を崩し、故郷に戻ろうと思っている」。岸上昭子さんが島さんの思いを伝えに同和対策課（現在の人権課）に来られ、わたしは北九州市の島さんを訪ねました。島さんはベッドに寝た状態でしたが、「よう来てくれた」と迎えてくれました。「ぜひ観音寺に戻ってきてください」と伝え、1時間くらい話をしました。柔和な表情をした穏やかな方だという印象でした。私が帰った後、島さんは「しばらくこの部屋を掃除しないように」と昭子さんに言ったそうです。「彼が観音寺の、ふるさとの風を運んできてくれたから、それを感じていたい」と。その後、帰郷は実現せず島さんは亡くなりました。お会いできたことを大変光栄に思っています。

ハンセン病とは

「癩菌」によって感染する病気です。現代の日本では、たとえ感染したとしても発病することはほぼありません。発病すると、手足などの末梢神経が麻痺し、皮膚の病変や手足が変形することがあります。1943年に米国で「プロミン」という薬がハンセン病によく効くことが報告され、日本では1949年から広く使用されるようになりました。現在はWHOが無料で配布する飲み薬での治療が行われ、服用すると、癩菌は数日で感染力を失います。ハンセン病は薬による治療だけで治すことができる病気です。

90年続いた強制隔離

国は強制隔離の方針の下で、患者の隔離を推し進めるために「無癩県運動」に取り組みました。都道府県ごとにハンセン病患者をあぶり出し隔離しては、患者がいらない状態を実現することが目的でした。患者が出た家は真っ白に消毒され、それがハンセン病に対する人々の恐怖心を増幅させるとともに、その家から患者が出たことを周囲に知らしめるものでもありました。家族は差別と排除の対象となり、離婚や失業、一家離散、一家心中、自殺に追い込まれることもありました。また、優生保護法により、患者に対して断種手術や堕胎手術を強制的に行っていました。療養所は患者が病気を治して社会に戻っていくための施設ではなく、そこで死んでいくための場所でした。

帰りたくても帰れない人がいる

治療薬がなかった時代に病気が進行した人や治療の開始が遅れた人には後遺症があります。知覚麻痺や運動障害のほか、手足や指を切断している場合もあります。そのような外見に対する偏見と、「ハンセン病は遺伝病」「強い感染力がある」という誤った知識から、家族や親族に対する差別が今も残ります。長い隔離生活により、療養所の外で暮らすことに不安を感じ、安心して退所することができない人もいます。また、入所者の多くは本名を隠し、偽名で生活しています。療養所で亡くなった人の遺骨の多くが、実家の墓に入れず、各療養所内の納骨堂に納められています。

私の手は曲っている。しかし握まねばならない。菌が抜けている。だが噛まねばならない。眼球を失っても 見ねばならず、足を失っても歩かねばならない。

(志樹逸馬「生きるということ」より)

祖国浄化の名のもとに
ある人は家族のしらぬまに収容され
ある人は妻子がすがりつき泣き
叫ぶのに
荷物のようにトラックに乗せられ
ある人は監房に閉じこめられ
呪いながら狂死した
あの暗い部屋の壁の
なまなましい爪のあと

(松田一夫「暗い部屋の壁」より)

いまごろ お前に
平和な夢が 訪れているだろうか
知られてはならぬ 遠い地点に
この父は病んでいる
お前のために
けれどもお前の未来の為に
シミほどの汚れを残したくない (中略)
わたしは かなしい日暮を
お前に 知らせたくない
お前に 味わせたくない
(西羽四郎「子に」より)

四国唯一のハンセン病療養所

国立療養所大島青松園

現在、日本には国立・私立を合わせて14力所のハンセン病療養所があります。設置当初は隔離が目的であったため、多くは交通の不便な場所にあります。四国で唯一の療養所が高松市の離島・大島にある大島青松園です。1909年に開設され、中四国8県から患者が集められました。2010年開催の第1回瀬戸内国際芸術祭から会場の一つとなり、ハンセン病や島の歴史を知らない人たちも多く訪れるようになりました。現在は37人の回復者が暮らしています。



住所：高松市庵治町6034-1
(高松港から約30分)
※施設見学には事前予約が必要です。

ハンセン病の歴史と正しい知識を伝える場所

国立ハンセン病資料館

ハンセン病問題に関する正しい知識の普及啓発により偏見・差別を解消し、患者・元患者と家族の名誉回復をはかることを目的とした資料館。定期的にさまざまな企画展が開催されており、5月7日まで開催された「ハンセン病文学の新生面『いのちの芽』の詩人たち」では、島さんの詩「ふるさとの家进行」も展示されました。



時間：午前9時30分～午後4時30分
(月曜、祝日の翌日休館)
住所：東京都東村山市青葉町4-1-13



編集後記

藤田彰一先生が市職員向けの人権研修で島さんの話をしてくださったのは9年前のこと。私は島さんの母校・観一高の卒業生ですが、島さんについて全く知らなかったことに衝撃を受けました。没後20年の節目に、市民の皆さんに島さんのことを知っていただきたいと、今回の特集を企画しました。人権問題ではよく「寝た子を起こすな」と言われます。しかし、目をそらさずに過去を見つめ、現在に生かすことが大切です。同じように苦しむ人や家族が二度とない社会、市にしていかなければと思います。
(秘書課広聴広報係 安藤 恵子)

市内図書館で借りることができる島さんに関する本



島比呂志
書くことは生きること
立石富生／著
高城書房

島さんと22年
交流した著者
が書く半生記



ハンセン病
文学全集3 小説
大岡信ほか／編
皓星社

「海の沙」「奇妙な国」
など島さんの小説
8編を収録



ハンセン病療養所
から50年目の社会へ
島比呂志／文
矢辺拓郎／写真
解放出版社

社会復帰後の
エッセーと詩